

秋田県の話 題

白神ねぎ販売好調

ブランド化へ



J A あきた白神（本店能代市）の特産「白神ねぎ」の2016年度の販売額が過去最高の13億円に達した。2年連続の10億円超えで、品質向上や安定出荷に向けた生産農家とJ A の努力が実を結んだといえる。ブランド化と生産拡大に向けた取り組みを一層強化し、地域農業の振興につなげたい。

16年度は、152戸が130ヘクタールで白神ねぎを栽培。販売額は昨年12月末で12億4900万円（出荷量3501トン）に達していた。天候不順などに伴い年が明けてからも市場価格は高値で推移したため販売額が伸び、13億111万円（同3658トン）と初めて13億円を突破した。農作物は天候や他産地の動向により価格が変動するだけに、目標としていた10億円超えを2年連続で達成したことは生産農家にとって大きな自信になるだろう。農家の所得アップに向けて県がコメ依存からの脱却に力を入れている中、白神ねぎの販売の好調さは県内他地域の野菜産地づくりにも刺激を与えそうだ。

同J A 管内では能代市で1950年ごろからネギ栽培が始まり、価格が比較的安定していることから転作物として徐々に栽培面積が拡大。2007年度の販売額が8億円に達したのを機に、10億円を目指した取り組みが始まった。

産地基盤を強化するため通年出荷体制の構築に努め、一般的な夏ネギや秋ネギに加えて、春採り、初夏採り、雪中採りの栽培を推進。週1回の品質検査も導入するなどして品質の向上と均一化を図った。

さらに12年には「白神ねぎ」として商標登録したの続き、13年には行政などと共に「10億円販売達成プロジェクトチーム」を立ち上げ、首都圏でのPRも展開。県と市、J A による「園芸メカ団地」（1ヘクタール）が整備されたことも追い風になり、15年度には11億708万円（出荷量3508トン）と初めて10億円を突破した。

白神ねぎは首都圏向けの出荷が大きな割合を占める。「辛味が少なく、加熱すると甘みが増すため鍋料理に適している」などと市場や消費者の評価は高い。市場からは出荷量を増やすよう求められており、今後いかにして市場のニーズに対応していくかが課題になる。

同J A は18年度の目標販売額を15億円としている。他品目からの転換を加速させるなどして栽培面積の拡大を図るとともに、産地をけん引していく若い担い手の確保も重要だ。

国内のネギの産出額（14年）を見ると、全国ブランドの「深谷ネギ」を抱える埼玉県が179億円とトップで2位は千葉県の170億円。本県は19億円で23位にとどまっている。白神ねぎの2年連続の10億円超えを、新たな出発点と捉えたい。今後も栽培技術と品質の向上に努め、全国有数のブランドに育ててもらいたい。節目の年に広く知られるようになれば、各地で議論されている地方再生の参考にもなるだろう。

干し餅作り盛ん

（秋田魁新報より転載）

秋田県内各地で冬に作られる米菓子「干し餅」は凍り餅ともよばれ、冬の寒波を利用して作る保存食です。冬の寒さの厳しい時期、秋田県五城目町大川谷地中の農家では、干し餅作りが盛んに行われます。

約5センチ四方に切った餅をひもで結び、冷水に漬けてからいつたん冷凍。その後、屋外で3日間寒風にさらし、屋内に移して3週間ほど乾燥させて仕上げるのだそう。



干し餅は、県人会のなべっこ遠足の会場でも毎年販売しています。毎回すぐに完売する人気の懐かし味です。今年も期待していています。

天寿酒造 「立春朝搾り」を出荷



由利本荘市矢島町の天寿酒造（大井建史社長）は立春の2月4日、純米吟醸の生原酒「立春朝搾り」の出荷作業と瓶詰めを行っている。

約3千本を出荷した。天寿酒造では4日未明、社員がタシクに入ったもろみをじっくり搾り出し、早朝から瓶詰めを行った。立春朝搾りは、春の訪れを祝う酒として全国の蔵元や酒販店で組織する「日本名門酒会」が企画。

（東京）が企画。本県からは同社のほか、秋田市の新政酒造が参加した。



新政の立春朝搾り

（秋田魁新報より転載）

コメ販売競争激化



日本穀物検定協会（穀検）の2016年産米「食味ランキング」が発表され、最高評価の「特A」を獲得したのは本県の県南産あきたこまちなど過去2番目に多い44銘柄に上った。穀検は国内で最も権威のある穀物の第三者検定機関で、そのランキングは市場評価を左右する。今回の結果を見ると、東北では「つや姫」（山形）や「青天の霹靂」（へきれき）、「青森」などのほか、参考出品された「銀河のしずく」（岩手）も特Aを獲得。全国では良食味の新品種が続々と登場している。

その一方で国内のコメ消費は毎年平均で約8万トン減少しており、産地間競争の激化と相まって販売競争に拍車がかかっている。本県としても市場ニーズを見極め、用途別に県産米を安定供給していく態勢づくりが求められる。

本県からはJ A 全農あきたが産地銘柄として県北、銘柄として県南、県央、県南それぞれのひとめぼれ、県南のゆめおぼれ、この5銘柄を出品。県南のこまち以外は特Aに次ぐ「A」だった。例年に比べて特A銘柄の変動が大きい中、5年連続で特Aを維持した県南こまちの健闘を評価する声も聞かれる。



県はコメ偏重からの脱却を推進するが、コメは本県の農業産出額の5割余りを占める基幹作物だ。コメ産出額も新潟県、北海道に次ぐ全国3位であり、販売競争を勝ち抜くには新たな戦略の構築が欠かせない。デビューから30年以上が経過したこまちのブランド力低下は否めない。このため県は「こまちを超える食味」を目標として新品種を開発中で、誕生は5年後の22年になる予定だ。